

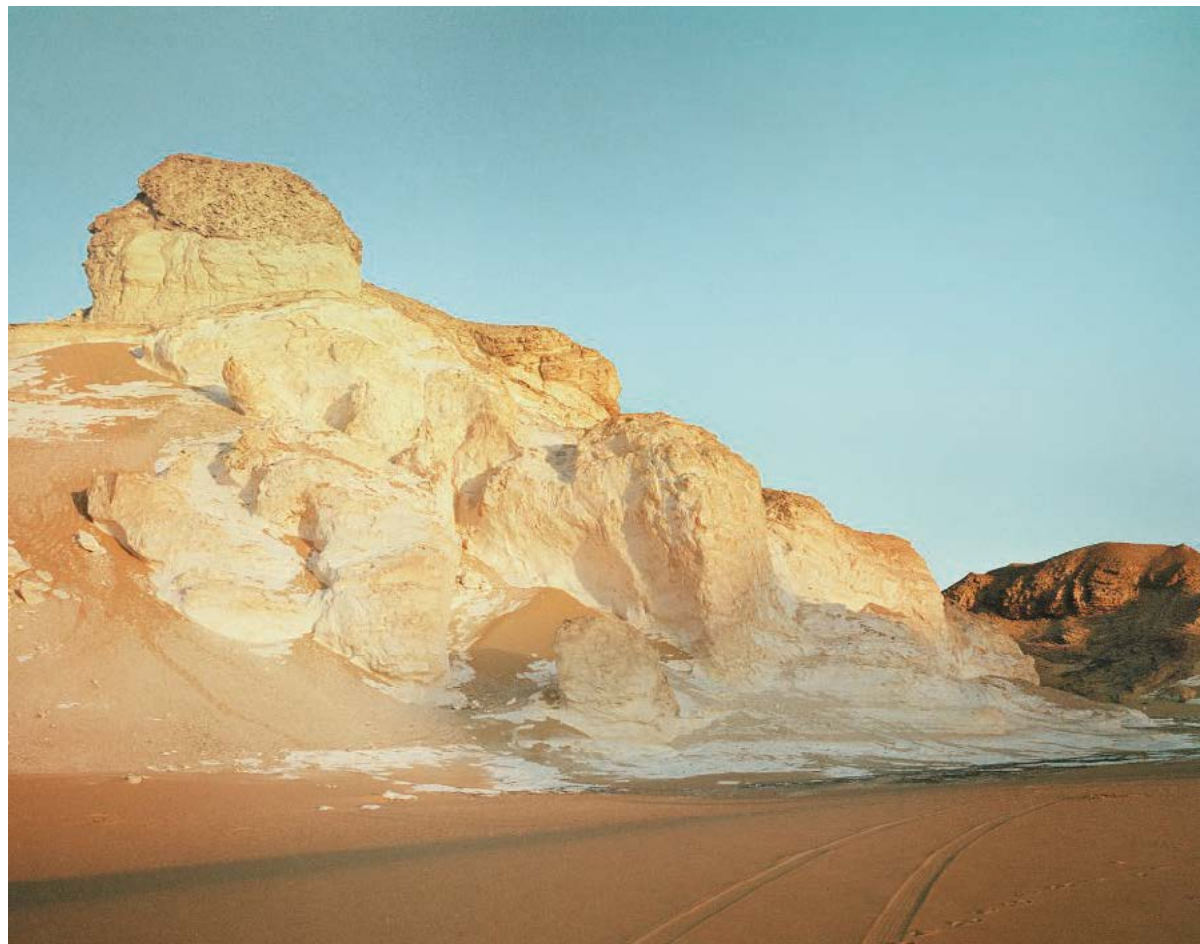
# 砂漠にまどろむ白亜の揺りかご

エジプトの白砂漠の驚異的な地質学的特徴と壮大な歴史は、今日の私たちの理解を超えている。太古の昔、この地域は緑豊かで肥沃だったが、ファラオの時代以降、乾燥地帯となって、現在に至る。驚くべき過去を秘めた、気が遠くなるほど美しい場所を旅する。

文 サイモン・イングス

写真 キャサリン・ハイランド





【前見開きページ】  
白砂漠のエルジャヤメ（または  
サハラ・アルベイダ）では、  
砂漠の向こうに、風化の  
進み方によって姿が異なる  
硬質な岩が、チェスの  
駒のように立ち並ぶ。

【当見開きページ】  
（左）砂漠や岩肌の色は刻々と  
変化していく。太陽が  
沈むにつれて、オレンジから  
ピーチへと、暖かい色の輝きが  
移ろう様子が見られる。

（右）雪崩を連想させる  
この岩には、何百万年も前の  
ハマグリやウニなどの化石が  
含まれ、海底だった時期が  
あることを物語っている。



カイロの南西560キロ。68万  
650平方キロに及ぶエジプト西部  
砂漠の窪地の真ん中に、ファラフラ  
と呼ばれる町がある。そこにはオア  
シスがあり、古くから続く家は、そ  
れぞれ十分な広さの庭を持つている。  
デーツ、オリブ、レモンが育ち、こ  
の町はこれまで食糧難に見舞われ  
たことがない。温泉にも恵まれ、地  
熱エネルギーを利用した、町への電  
力供給計画が、長年議題となってい  
る。今のところ、町から車で5分ほ  
ど離れた平原の地下にセメントの貯  
湯槽が設けられ、住民のリフレッシ  
ュや、この地域を訪れる数少ない観  
光客の娯楽に役立てられている。

ファラフラには、この地で生まれ  
育った人々が5000人ほど暮らし  
ているが、彼らにアラビア語で話し  
けると、ガイドブックに書かれてい  
るエジプトとは全く異なる場所に  
来たように感じる。特に、年配者は方言  
が強く、砂漠を緑化する政府の墾井  
事業に従事するため、ナイル川のデ  
ルタ地帯から来ている数万人のエジ  
プト人も、途方に暮れるという。

ファラフラは、カイロの文化圏か  
ら少し外れている。それもそのはず、  
ここはリビアとの国境に近く、中心  
部には、昔の交易路を記憶している  
遊牧民、ベドウィンが居住している。  
さらに重要なのは、歴史が古いとい  
うこと。カイロはもちろん、5000  
年の歴史を持つテーベ（現在のルク  
ソール）よりも古いのだ。この地域に  
は、少なくとも1万年以上前に集落

が成立していた。分かっている限り、  
ファラフラより古い集落は、エジプト  
には存在しない。ファラフラを中心  
とするこの地域は、人が定住する術  
を学んだ場所なのだ。

現在、地球上で最も乾燥した場所  
のひとつに、緑の前哨基地が残って  
いるというのは、とてもロマンチック  
な話だ。植民地時代、手帳とコンバ  
スを携え、オアシス伝いに、シワから  
バハレイヤ、ファラフラ、ダフラを  
経てハルガまでたどり着いたヨーロッ  
パの地理学者や冒険家、考古学者た  
ちは、足元の砂の下にエデンの園の亡  
骸が埋もれていると考えていた。彼  
らは間違っていない。ファラフラから  
南西に車で数時間ほど離れた洞窟の  
内部に、ヤギやガゼル、キリンとい  
った動物、そして当時の生活を裏づ  
ける舟を描いた石器時代の壁画が残  
っている。

砂漠がかつて海底にあったことや、  
そこに花が咲いていたことは、容易  
に想像できる。問題は、現在、白砂  
漠国立公園になっているこの地域が、  
いつ乾燥したかということだ。この  
一帯は、ファラオの時代にはすでに砂  
漠化し、ファラフラは地中海とリビア  
のサハラを結ぶルート上の中継地に  
過ぎなかった。放牧も採石も行われ  
ず、あの不撓不屈のローマ人がこの  
地を占領した際にも、数本の掘り抜  
き井戸が設けられただけだった。そ  
れでも、失われたエデンというroman  
チックな夢は色あせない。この地域  
はなぜ、「タイフト（牛の土地）」と、



ダフラとバハレイヤのオアシスのほぼ中間に位置するファラフラのオアシスは、西部砂漠のなかでも白砂漠に最も近い、孤立した場所にある。古代交易路の水場だった歴史を持ち、ファラフラの

人々には庭園(左)を、農業や羊毛貿易を支える羊、ラクダなどの草食動物には肥沃な土地を提供する。ナツメヤシから新鮮なデーツが手摘みで収穫され(右上・右中)、木陰では牛が草を食む(右下)。



かつて呼ばれていたのだろうか。興味深いことに、ここではウシの化石が全く出土していない。ラクダの化石は出ている。ガゼルやダチョウもだ(ダチョウの卵の殻は器として役立っていたので、この地域の人々が陶器をつくろうと思いつかなかったのも納得できる)。それなのに、ナイル川を中心とする文明は、乾燥し、荒涼とした、この辺鄙な砂漠の一角を、豊饒な土地として記憶しているのだろうか。過去四半世紀にわたる考古学的研究が、その答えを見つけた。この文明はナイル川から始まったのではない。ファラフラ周辺の湿地帯で生ま

れたのだ。土地が乾燥するにつれて、牧畜と農業の習慣は東へと広がっていった。白砂漠へは車で行けるが、ガイドなしで訪ねるのは得策ではない。ラクダで1週間の探検の旅がベストだ。この砂漠は山が多く、片持ち梁のように突き出た雲状の奇岩群が見られる。その形は、まさしく雲のように、測ることも覚えておくこともできない。この風景は、車で行くより、歩きながら楽しむべきだ。谷間の平地を20分ほどのんびりと歩いて横切るだけで、丸一日トレッキングしたかのような充実感を味わえる。あり得ないような姿でそそり立つ岩の高さは、

砂丘より低い。砂と風が谷のチョーク岩を氷河のように侵食している場所では、撮った写真がどうしてもアイスランドの風景にしか見えない。振り返ると、風に吹き寄せられた砂が、山の裂け目から流れ込み、キャンプを見失ったことに気づく。よし、歩こう、気を引き締めて。光の変化が、あらゆるものの色を塗り変えていく。ここには、二方向から同じように見えるものは絶対に存在しない。対称性とは無縁の世界なのだ。白砂漠は、確かに白いのだが、太陽光が古代湖の跡に残ったチョーク岩で屈折し、風景をあらゆる色に染める。あり得る限りのオレンジ色



奇妙な塔が林立する風景のなかで、視覚と精神は覚束なくなっていく。見たものはすべて、移動するにつれて、姿を変えていく。

奇妙な塔が林立する風景のなかで、視覚と精神は覚束なくなっていく。見たものはすべて、移動するにつれて、姿を変えていく。しんとした静寂の世界では、音もまた人を不安にさせる。姿を変え続ける岩の間を歩いていると、その下方のえぐれた部分に足音が反響し、増幅され、自分の後ろを軍隊が行進しているかのように錯覚する。ある場所では、腰の高

い台座の上に鎮座する巨大な抽象彫刻の秀作のような姿を見せている。その様は、古代都市の議事堂の廃墟や、巨大な石の頭蓋骨、巻貝のような形の玉座、そして（もちろん）スフィンクス、あるいは控えめに見てニワトリなどを連想させる。

奇妙な塔が林立する風景のなかで、視覚と精神は覚束なくなっていく。見たものはすべて、移動するにつれて、姿を変えていく。しんとした静寂の世界では、音もまた人を不安にさせる。姿を変え続ける岩の間を歩いていると、その下方のえぐれた部分に足音が反響し、増幅され、自分の後ろを軍隊が行進しているかのように錯覚する。ある場所では、腰の高

【前ページ】  
何世紀もの間、砂嵐に侵食された岩は、彫像のような姿で砂漠にたたずむ。人の顔のように見える岩（右上）。巨大なキノコあるいは木と、その横にうずくまるニワトリ（左上）。剥き出しの巣の上に立つ巨大な卵（右下）。木や石を彫るノミのような形の岩（左下）は、そのまま

記念碑として使えそうだ。  
【当ページ】  
1980年代から開発が進むファラフラの町。フリキ屋根のモダンな建物とは対照的に、ファラフラの伝統的な土の家は、その多くが荒れ果てている。現在、住民の多くが、町の中心部を取り巻くように拡大する集落で暮らしている。

藤色。夜明けには、思いがけない北極の青があらわれる。暗い縞模様は、大昔の火山に由来する鉄の塊か、あるいは石化したアカシアの残骸であることが分かった。地面には、石化した小枝の断片が散らばっている。チョーク岩に根づいた状態で石化したギョリュウの若木の細い幹は、手で割れるほど柔らかい。

この地域は長い間乾燥していたため、地質はもはや雨を覚えていない。排水路や側溝の跡、川床すらなく、かろうじて残った古代湖の岸も、風と砂ですっかり削られ、風景のなかで判別するのは困難だ。火星探査機マリナー9号やバイキングの着陸船、軌道船が火星の撮影に成功した時、NASAは地球の衛星画像ライブラリーから、火星の表面に似た画像を探し出した。それが白砂漠だ。白砂漠の研究は、現在のNASAのミッション計画に情報を提供し、火星の研究を押し進めることに貢献している。

砂漠の別の場所では、かつて地平線まで広がっていた大きな湖の底に立つことができる。このチョーク岩は、侵食されてほとんど残っていないが、わずかに残った岩塊が、風で運ばれた砂によって下方から侵食され、狭い台座の上に鎮座する巨大な抽象彫刻の秀作のような姿を見せている。その様は、古代都市の議事堂の廃墟や、巨大な石の頭蓋骨、巻貝のような形の玉座、そして（もちろん）スフィンクス、あるいは控えめに見てニワトリなどを連想させる。

奇妙な塔が林立する風景のなかで、視覚と精神は覚束なくなっていく。見たものはすべて、移動するにつれて、姿を変えていく。しんとした静寂の世界では、音もまた人を不安にさせる。姿を変え続ける岩の間を歩いていると、その下方のえぐれた部分に足音が反響し、増幅され、自分の後ろを軍隊が行進しているかのように錯覚する。ある場所では、腰の高

